

お茶のこころを語る――

平成27年7月1日発行
月刊「茶の間」(緑陰号)
毎月1回1日発行

月刊 茶の間

2015

7

緑陰号

お囃子が夏空に響いて
祇園祭の夏が始まる!

夜は三味の音 津田楼へ

年に一度の特別な夜
愛宕山千日詣

夏のごちそう 京のかき氷

夏の音色に
こころ魅かれて



●白石美帆

今、あなたに会いたい 京を継ぐひと

第一〇二回 日吉屋 五代目

西堀耕太郎さん

創業は江戸時代の後期。初代が開いた傘店がその始まりである「日吉屋」の五代目当主、西堀耕太郎さんは、千年の歴史を持つ和傘の構造や伝統美を現代感覚でデザイン化し、照明という新たなかたちに発展させました。伝統をいかに伝え、残し、そして成長させていくか、興味深いお話を伺いました。



海外に目を向けつつも、日吉屋の根幹はやはり和傘の仕事。祇園祭の鉾や山で使う大きな傘の修理など、伝統的な仕事にきちんと関わることで、ほんとうにグローバルな視点を持つことができるといいます。「優れた技には必ず新たなニーズがありますし、ニーズに合うことで、さらに発展することができる。職人さんたちが誇りと自信を持って技を継承していくようにすることも僕らの世代の責任だと思います」

この技を残したい！ その思いが全ての始まり

「日吉屋」店内の天井を見上げると、花が開いたように美しい灯りが、ばかり、ばかりと浮かんでいます。細い竹のラインが繊細な表情を映し出し、モダンでいて、ゆかしい和の風情が漂います。

じつはこの灯りは、京和傘をベースにつくられたもの。開発したのは、五代目当主

の西堀耕太郎さんです。

西堀さんは和歌山県新宮市の出身で、以前は新宮市役所に勤務しており、観光行政に関わっていました。その頃に知り合った奥さんの実家が、江戸時代に創業した京和傘の老舗だったのです。

「当時、家業は細々とやっていましたが、洋傘の普及もあって年収は激変し、店を畳むことを考えていたようです。でも、はじめてここに来て、番傘を手にしたとき、いまだ、こんな傘をつくっているところがあるんだ！」と、感動して、その魅力にはまってしまったんです」

手にした傘は、竹と和紙で出来ており、ぱりぱりと音を立てて開くときの心地よさ

は格別。洋傘はない、重厚な存在感があり、しかもそれがいまだ、人の手によってつくられていることに心底、驚きました。また、エリザベス女王が初来日した時、桂離宮で行なわれた野点の茶会にも、日吉屋の大きな傘が使われていて、國賓のおもなしにも使われていることを知り、これをやめてしまふのは本当にもつたないと感じたそうです。

「コンビニでビニール傘が売られるようになり、傘屋という家業自体が成立しない時代でしたら、とにかく、かつこいい！ 深い！ これはほんまに良いものや！ 残していいべきものだ」と確信したんです」

観光課にいたときに、ウェブ関係のノウハウを身につけていた西堀さんは、和傘がなんとか売れないと、まだ黎明期にあつたネット展開を思いつきました。新宮市で働きながら、京都に通い、職人さんに番傘づくりを習う間に、ネット販売をスターさせたのです。

「最初のお客さんは東京の踊り関係の方で、売れただことが嬉しくて今でもそのことはよく覚えています。和傘にちゃんとニーズがあること、ネットを使えば、ニーズに出来ることを実感しました」

その後、西堀さんは周囲の反対を押し切って、市役所を辞めて京都に移住し、日吉屋に入りました。そのうち、少しずつですが、ネット顧客も増えて、年間売り上げも伸びてきました。しかし西堀さんは、そこで満足はしませんでした。

和傘の美しい構造を 現代のデザインに生かす

その後、ある昭明デザイナーとの出会いが、大きな転機をもたらすことになります。

和傘は上下の三角錐をつくり、上部を留めて、下部を開くことで機能します。西堀さんは、傘の上部もはずして完全に開いてしまい、そこから美しい筒型を生み出しました。新発想から生まれたランプシェードは、その後、展示会で大好評を得て、問合せが多数、寄せられました。さらなる試行錯誤を繰り返して、筒型を開閉できるかたちにした灯りが「古都里 KOTORI」シ

日本のほんものの手わざは、必ず生き残ることが出来る。京和傘がそのことを教えてくれました。



シリーズでした」

スチールやABSプラスチックといった新素材を採用し、フレームが開閉するデザインの灯りは、強く、しなやか。モダンでシャープな印象がありながら、やはり和傘を原点にしているからでしょうか、どこかはんなりした美しさを持ち合せています。こうして、二〇〇五年から取り組み始めた昭明関係の仕事は順調に発展し、今では一流ホテルやレストラン、京都駅など、商業施設や公共スペースの空間デザインに採用されるまでに成長しています。

海を渡つて大きく羽ばたく 日本の技の素晴らしさ

今、西堀さんが力を入れて取り組んでいることがあります。それは、日吉屋の成功例のように、京都のみならず、日本全国に埋もれている、さまざまな技の海外進出サポートの仕事です。

「以前、海外のバイヤーさんに言われたことがあるんです。メイド・イン・ジャパンはそのままでは海外で通用しないとパンくずれてしまう。これは衝撃的でした。つまり、オリジナルのかたちのままではダメということ。日本の手わざを使って、海外の人々のニーズやライフスタイルにマッチしたかたちにつくりなおして、発信する。そのひと手間が必要だと。海外の人は日本人にはとても出来ないような発想をしますが、それがヒントになるんですね」

まずは、目利きのバイヤー目線ありきで、

この技を生かして、こういう目的、こういううデザイン、こういう機能にすれば売れるはず。そういった発想を取り入れて、新たなものづくりに活かしていく。これはまさに『和傘の技術で世界を目指す』という、日吉屋が掲げてきたコンセプトそのものといえます。

西堀さんは、二〇〇八年に『T.C.I.研究所』

という組織を設立し、さらに海外進出のサポート体制をパワーアップしました。海外の市場調査や商品開発、そして販路の発掘までをトータルで手がけています。

「まだまだ日本には、日の目をなかなか見ない技術が埋もれています。その技術が廃れ、消えていくというのはほんとうに惜しい。とくに、京都では、自分の手わざの素晴らしさに気づいていない職人さんが多いです。こんな古くさい仕事を続けてても仕方ないわ、などと聞くと、ほんまにもつたないことやなあと。優れた手わざを海外バイヤーに繋いで、日本人の発想とまつたくちがうものをつくりだすことで、素晴らしい付加価値が生まれるんです」

最近は京都市など行政と連携して、こうした活動がさらに盛り上がっているといいます。

西堀さんが常に念頭においているのが伝統は革新の連続。ということ。革新的なことが、世に定着して新たな伝統となり、その先には、また新たな革新が始まっています。

西堀 耕太郎

にしばりこうたろう ● 和歌山県新宮市生まれ。結婚後に妻の実家である「日吉屋」に入り職人の道へ。平成十五年に五代目就任。和風照明「古都里 KOTORI」ではグッドデザイン賞を受賞。国内外のデザイナーや職人とのコラボレーション商品の開発にも積極的に取り組み、海外への販路開拓コーディネーターとして「T.C.I.研究所」代表も務める。

「その連鎖の中で、自分は何ができるか? を問われていると思います」

代々、守られてきた技が、縦に繋がっていくだげでなく、横へ、横へ、大きな輪となつて、海を渡り、水平に広がっていく。西堀さんが、京の小さな和傘店で投げかけた小さな波紋がどんどん広がり、今や、世界を舞台にした大きなビジネスへと発展しているのです。

「日本、とりわけ京都は宝の山です」

京の強み、素晴らしさを平らかな目線で見つめるその先には、大切に残していくたい技たち、これから進むべき新しい道筋が、しっかりと描かれているにちがいありません。

海外進出サポートの事業を通して、さまざまな貴重な出会いがあったそうです。「友禅の染め型をつくるある高齢の彫り師の職人さんは、きものが衰退していく中、家業を辞めようと思っていました。ところが、その技を駆使して、レザーを彫ってもらい、和モダンな電子機器カバーをつくってみたところ、欧米で大当たりしたんです。今では、ヨーロッパでワークショップを開催するまでになっていて、このおじいちゃんは“レジェンド”と呼ばれてていますよ(笑)」

和傘ならではの美しい骨組をあえて見せるデザインを採用し、さまざまな改良の末に完成した灯りは、国内外で高い評価を得て、二〇〇七年にグッドデザイン賞を受賞。さらにフランス人デザイナーとのコラボレーションを実現するなど、華やかに発展していました。

『古都里 KOTORI』をニューヨークの国際現代家具見本市に出品した時のこと。

西堀さんは、あるバイヤーから声をかけられます。「その人は、ディストリビューター、つまり現地の販売代理の仕事をしている人で、竹と紙以外の素材で灯りをつくることは出来ますか」と聞かれたんです。そこから発想を得たのが、『MOTO』という新しい



京都のデザイナーズホテルを飾る和風照明『古都里 KOTORI』。和傘の技術を生かしてつくられています。

